

## 第17話 織田信長の四方征伐

足利氏が亡びると、信長が代わって天下の政治を執ることとなる。  
彼は城を近江の安土に築いて、更に広く遠く四方の征伐を始める。

## 安土時代

將軍 足利義昭が河内に逐われて、室町幕府が滅亡すると、天下は自然に信長の手に帰した。勿論、今までも、実権はこれを握っていたのですが、ともかく足利將軍を奉じている以上は、なお室町時代のつづきでした。しかし、今は全くこれとちがって、信長が自由に天下に号令する事となったのです。それで、この時代を（彼が安土に城を築いていたのは、後にも述べるように、天正4年の事ですが、普通には室町幕府の亡びた天正元年（西暦1573年）から以後を）安土桃山時代と呼んでいます。

## 朝倉氏の滅亡

さて、天正元年の7月、將軍義昭を河内に逐って、これを廃した時には、すでに甲斐の武田信玄はその3月前の4月に病死していました。即ち、信長に取っては、東西共に身近な心配が消えて無くなったのです。そこで、彼はその8月に、改めて兵を近江に進めて浅井長政を攻めた。すると、朝倉義景が長政のために直ぐに援兵を率いて近江に出て来た。けれども、すでに姉川の戦い以来、しだいに勢いの衰えていた朝倉氏は、とても新勝の勢いの盛んな織田氏の敵ではなかった。

信長が先づ主力を義景に注いで、小谷山の西北4km余りの木之本まで来たところを猛烈な勢いで脅かすと、1戦にも及ばずして忽ち全軍が消えて、義景は遠く越前の本城一乗谷をさして逃げて帰った。信長が全軍を駆ってこれを追うと、義景は更に東のほうの大野郡まで逃げた。しかしこの時にはすでに家臣は勿論、同族の者まで、その殆ど悉くが信長に降ったので、ついに朝倉義景は失望して自殺した。年は41才でした。朝倉氏はここに亡びました。

## 浅井氏の滅亡

信長は直ぐに軍を近江に班して、小谷城を攻めた。今は浅井氏も、連合していた諸家は皆信長に破られて全く孤立し、僅かに小谷城1つを保っていたのですから、とても長く支えることなどは出来なかった。間もなく長政の父久政の住んでいた郭が先づ破られて、久政は自殺した。尋いで長政の本丸もまた破られた。しかし、彼の妻の小谷方は信長の妹ですから、信長はいかにしても長政を助けようと、幾度も使者をやって降伏を勧めたが、浅井長政は、すでに父が自殺したあとでしたので、ついにその勧めには従わずに、妻と3人の娘を信長に送り返しておいて、自殺した。時に長政は29才でした。浅井氏はここに亡びました。

## 小谷の方

なお序に述べておきますが、小谷方は後に兄信長の命に従い、3人の娘を連れて柴田勝家の後妻にな

第17話 織田信長の四方征伐

つた。そして勝家が後に秀吉に滅ぼされる時に、彼女も共に自殺したが、3人の娘は恙なく成人した。  
 長女は、後年、秀吉の側室となって、秀頼を生んだ淀君です。二女は、大津の城主京極高次の夫人となつた。三女は徳川2代将軍秀忠の夫人となつて、3代将軍家光を生み、又、第108代後水尾天皇の中官和子の御母となつた。

さて、浅井、朝倉の両氏が亡びた翌年、信長は久しく鎮定に苦しんでいた伊勢の長島一揆を伐つて大いにその徒を殺し、再び反抗することの出来ないようにした。しかし、長島一揆とは何か？ これには一応の説明が要るでしょう。

ながしま いっき  
**長島一揆**

そもそも長島というのは、尾張と伊勢との国境になっている木曾川の末に在る大きな三角州で、この一揆は一向一揆の略です。一向一揆は親鸞上人が始めた真宗(訳注：浄土真宗)、即ち一向宗の一揆で、その起こりは、かの平安時代の僧兵、即ち山法師や奈良法師などのそれと全く同じでした。すなわち、本願寺の富が諸豪族よりも超えたところから、世の乱れに乗じて兵を蓄えたために、無頼の徒がしだいに四方から集まって来て、所謂仏法保護の名の下に、しばしば戦乱を起こしたのです。

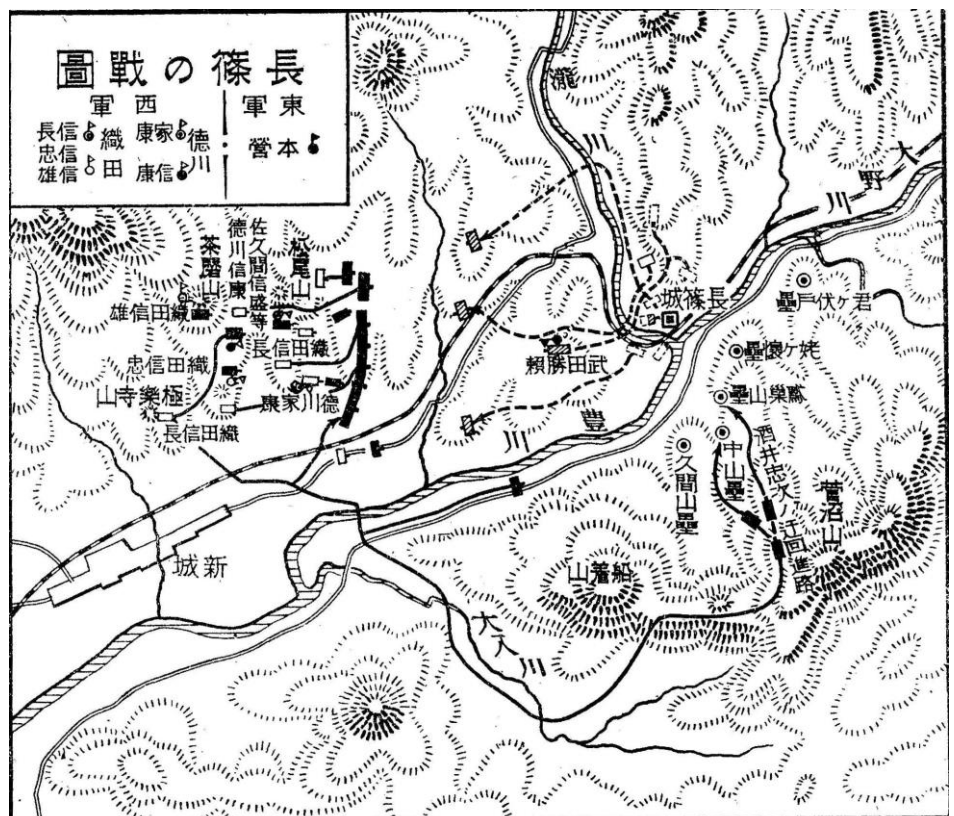
わけでも一向一揆が盛んだつたのは、北陸および近畿の地方でしたが、この長島一揆は、信長の本拠である尾張に近かつたので、さきの桶狭間の戦いに今川義元に身方して以来、常に織田氏に反抗をつづけていたのです。

さて信長は、長島一揆を伐つて根こそぎこれを平らげると、その翌3年には大阪の石山本願寺の一向一揆を攻めて、その与党の者を多く降して岐阜に帰つた。折から、甲斐の武田勝頼が兵を集めて三河に侵入したとの事で、徳川家康から火急の援兵を求めて来た。信長はすぐに大軍を率いて出発した。

ながしの えき  
**長篠の役**

これより先き、徳川家康は武田信玄に奪われた三河の東部を回復しようとしていたが、天正元年7月、長篠城がうまく手に入ると、奥平信昌を守将としてこれを守らせておいた。

ところが、長篠城は豊川の上流である滝川と大野川との合流するところに在って、両川をもって自然の濠とし、頗る要害堅固でしたので、武田勝頼もまた進んで東海道に出るため



## 第 17 話 織田信長の四方征伐

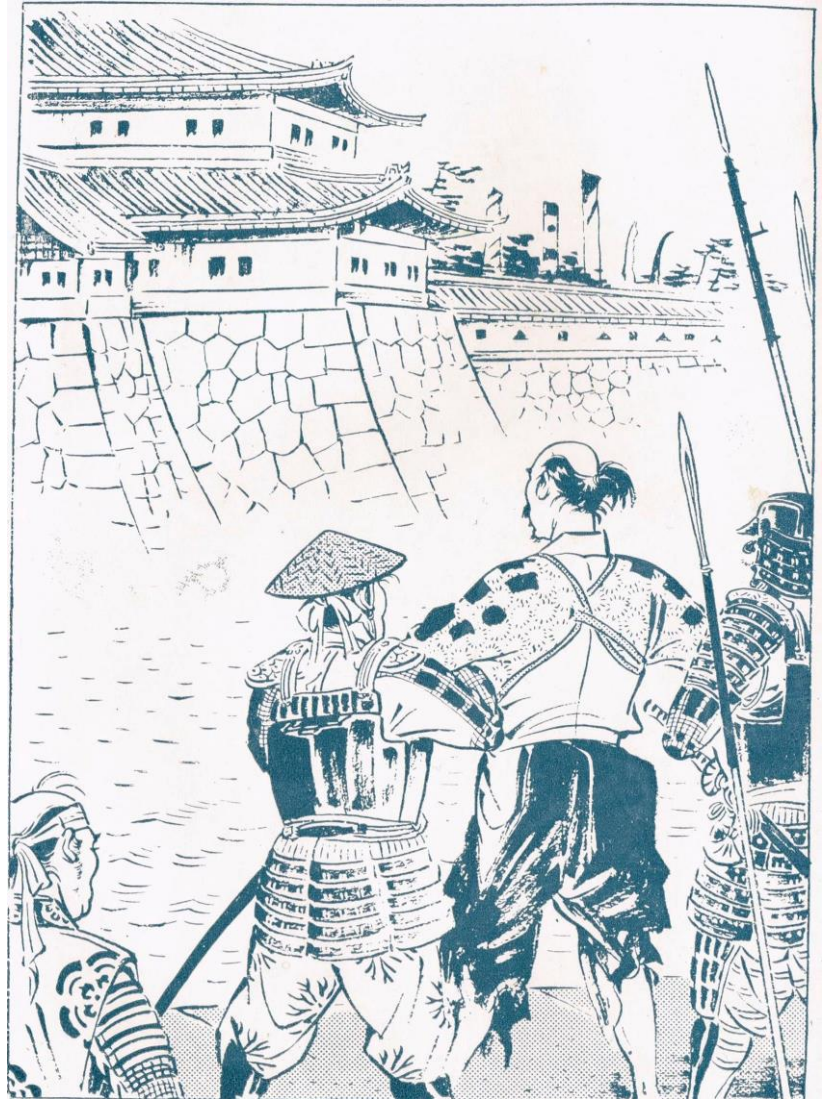
には、常にこれを奪い還そうと思っていました。それで、今、天正 3 年 5 月、大兵をもって急に長篠城を  
囲んで、糧道を塞いで、一気にこれを陥れようとしたのです。

しかし、守将の信昌は、当年取って 24 才の青年でしたが、もとより勇気に満ち満ちていたので、僅かに  
100 騎にも足りない部下と共に、寄せ手の大軍を物ともせず守っていた。けれども、次第に糧食の乏  
しくなるのには困った。そこで、援けを家康に請おうと考えたが、この厳重な囲みの中で、どうしたら使  
い出せるかの見当がつかない。信昌は城兵を集めて、誰かこっそりと城を抜け出して、この危急な様  
子を家康公に申し上げに行くものはないかと言った。この時、はるかの末座から進み出て、いと易々と引き  
受けたのが、今も美談としてその忠死を伝えられている鳥居強右衛門勝商という小侍です。

### 鳥居強右衛門勝商

勝商はその夜ひそかに城を忍び出ると、西のほうの岩根伝いに川をおりて、その水底をくぐるようにして遙かの下流に出てから、上陸した。そして、近くの山に登って、無事に抜けて出た事を知らせる合図ののろしをあげておいて、40 km 余りの道を岡崎に急いだ。

やっと翌日に岡崎に着いて、家康に城中の様子を告げた。しかし、この時にはすでに信長が援兵を率いて三河に入っていたので、家康は、「明日にも出陣するから安心して、十分に疲れを休めた上で、お供をせよ」といった。しかし勝商は、城中で待つ信昌に早く帰って返事を聞かせたいからと、すぐさま長篠に向って引き返した。



愛知 東端 長篠城門前の鳥居強右衛門勝商

ところが、城の近くまで来た時に、

不幸にも彼は武田勢に捕らえられて、

勝頼の前に引き出された。勝頼は事の次第を聴き取ると、敵ながらあっぱれな忠義の大功に感じて、先づその縄を解かせた上で、これから武田の家来になるなら、一命をも助けて、領地をも与えて、厚く召し使おうが、それには城の近くに行つて、「信長は近畿地方の軍に隙がなくて、当地への援兵などは思いも寄らないので、早く城を明け渡すように」と言えと言った。勝商は喜んで、承知したと言った。

さて翌朝早く、城の近くへ行くと、城中の親しい者呼び出して、「信長公も、徳川殿も、すでに数万

## 第17話 織田信長の四方征伐

騎の援兵を率いてご出馬になったぞ。2~3日中には、当地にお着きになる。いよいよ以って堅固に籠城なさい」とさげんだ。付き添っている武田方の兵士はびっくりして、あわてて勝商の口を塞いだり、脚を引っぱったりしたが、間に合わなかった。それで、また搦めて、勝頼にかく告げると、勝頼は、敵ながら勝商は義士である。助けてやれ、と言ったが、士卒らは勝商にたばかれたのを無念に思って、ついに長篠の城の向かいの有海原の篠原というところで、磔にして殺した。時に、鳥居勝商は36才でした。

やがて数日の後に、信長と家康との連合軍は長篠に押し寄せて、武田勝頼の軍と戦った。非常に烈しい戦いでした。しかし、連合軍の鉄砲隊が側面から攻撃するような形になってからは、武田方は全く敗れて、名将の多くがばたばたと戦死した。勝頼は漸くにして逃れて甲斐に帰った。この合戦から以後、武田氏の勢力は頓に衰えました。

### 安土の築城

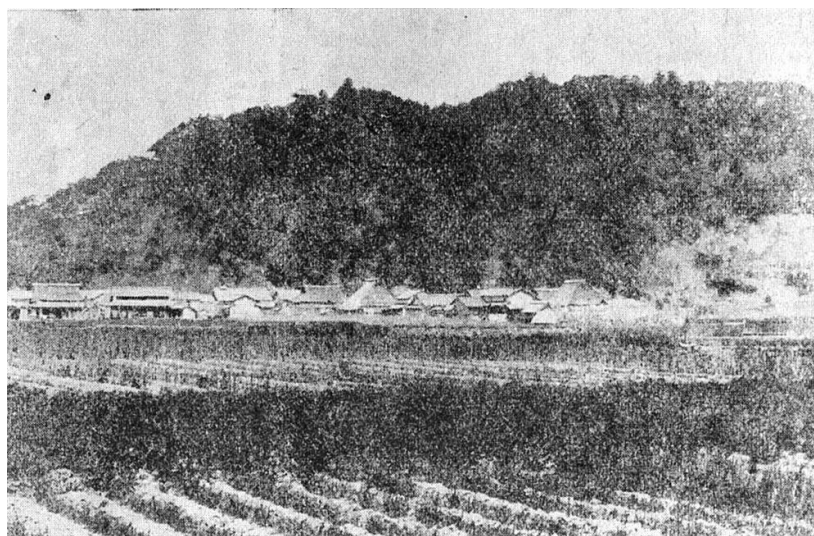
一方、すでに近畿地方を殆ど平定して、今また家康を援けて勝頼を破った信長の威勢はますます盛んでした。その領国は尾張、美濃、伊勢、伊賀、近江、飛騨、越前、若狭、山城、大和、河内、和泉および加賀の一部にわたり、部下の兵は十数万にのぼっていた。けれども、今後なお彼の敵となるべきものには、東北に上杉氏、東に武田氏、西に毛利氏、南に紀伊の僧徒および四国の長曾我部氏らが居て、いづれも大敵ですから、これに当るには、従来の岐阜城は規模が小さくて、適当ではなかった。

それで、信長は先づ根拠地を移して、そこで天下に号令するようにしようとしたが、而もその根拠地は四通八達の要路に当って、容易に天下の群雄を支配することが出来ると共に、第1条件として、京都に近く、天皇を奉ずるに都合の良いところでなければならない。ついに信長は、これを近江の蒲生郡の安土の地に得て、ここに城を築くことにした。(尤もここには、信長が先に六角氏に対するために築いた小さな城があったので、今度、それを更に大いに修築して、大きな居城にしようとしたのです。)

天正4年正月月中旬から工事を始めた。普請奉行は佐和山の城主丹羽長秀で、その領国の者が皆出て来て大いに働いた。信長は2月下旬には早くもここに移ったが、全く完成したのは4年後の天正7年で、越後の上杉謙信が卒した翌年です。

城は山によって高く聳え、7重の天守閣が美しく琵琶湖に望んでおり、その規模の大きなのと相俟って、まことに天下の壯観であったという事です。

これまで我が国の城は、皆規模の



びわことうがん 安土湖東岸 安土山 あづちじょうあと 安土城址

今も天守閣、本丸、二の丸、三の丸、諸将の邸址などが山上および山腹に残っている。

## 第17話 織田信長の四方征伐

小さなものですが、ここに信長が一新機軸を出してからは、築城術は大いに進歩しました。

### 石山本願寺の退去

さて信長は、安土の築城の間も、兵を四方に出して、平定の業はこれをつづけていた。天正5年10月には、羽柴秀吉に中国地方征伐を命じて安芸の毛利氏に向わせたが、これは、1つは大阪の石山本願寺が、毛利氏と心を合わせて、常に信長に反抗していたので、先づ毛利氏を滅ぼして、自然と本願寺の勢力を衰えさせようと考えたからでもありました。ところが、その翌天正6年の3月、本願寺は、もう1人の大切な身方でした上杉謙信が俄かに病死したので、ややその勢力を失いはじめたところに、天正8年の3月、正親町天皇から特に勅りが下って、信長と和睦して大阪を退去するようにと諭しになったので、元亀元年以来の11年間、信長に反抗して彼の近畿統一を妨げていた本願寺も、ついに石山城を信長に譲って紀伊の鷲森に移った。(その後、本願寺は鷲森から和泉の貝塚に移り、更に大阪に移ったが、後に天正19年に秀吉が京都に土地を与えたので、そこに大きな寺を建てて、これを本山とした。今の西本願寺がそれです。)

こうして大阪方面は全く平定したが、京都に近い西のほうの丹波もまた、その前年の天正7年の10月、久しく信長に反抗していた八上城(兵庫 丹波篠山市)の波多野秀治が、明智光秀に攻め滅ぼされて、丹波は平定された。

### 波多野氏の滅亡

しかし、この波多野氏の滅亡の時の事については、お話しておきたいことがひとつあります。波多野氏は応仁の乱以前から丹波に割拠していて、中々勢いが強かった。明智光秀は兵を丹波に進めてから、しきりに波多野氏の属城を落として、ついに天正6年の3月に、その本城の八上城に迫ってこれを囲んだが、容易に陥れることが出来ない。そこで、翌7年の7月、光秀は先づ自分の母を人質として城中に送り、秀治に降参して出るように説いた。秀治は弟の秀尚と共に光秀の陣にきた。光秀は2人を安土に送って信長に和を請わせた。ところが、信長は、久しく自分に抵抗していた秀治らを憎んでいたもので、光秀には何の沙汰もせず、2人を殺しました。

八上城中の者はこれを聞くと大いに怒って、直ぐに光秀の母を殺して再び籠城した。すると、光秀もまた怒って急に烈しく攻めて、ついにこれを陥れて丹波を平らげたが、世間からは、「光秀は母殺しだ」といって謗られた。勿論、光秀にしても、初めから母親を犠牲にするつもりなどは少しもなかったろうが、例の信長の一途の癩癖(訳注：癩癩持ち)から、事がそういう結果に終わったのです。それで、後に光秀が信長を弑するようになった理由の1つとしても、いつもこれが挙げられることになっています。

さて、中国に向った秀吉は、天正5年以来、しきりに播磨、但馬、因幡、伯耆などの諸城を陥れて、同10年にはすでに遠く兵を備中に進めて、将に大軍を催して来た毛利氏と決戦をしようとしていました。信長に取っての西の大敵がこうして秀吉と相対持していた時に、同じく彼に取っての東の大敵である武田氏を、信長は実に苦もなく滅ぼしました。

## 第17話 織田信長の四方征伐

こうしゅうせいぼつ

### 甲州征伐

これより先き、長篠の戦いに武田氏は多くの名将を失って、その勢いはまた元のようには振るわなかったが、その後、武田勝頼が良くない家来どもを信用して、領内の政治の仕方を誤ってからは、いよいよ衰える一方で、人望も無くなった。現に信濃の木曾義昌の如きは、信玄の娘を妻にしていたにもかかわらず、勝頼に叛いて、信長に人質を納れて、甲州征伐の先鋒にして貰いたいと申し出たほどです。

勝頼はこれを聞いて大いに怒った。彼はすぐに兵を出して義昌を討たせたが、天正10年2月、更に親ら20,000の兵を率いて諏訪に進んだ。木曾義昌は嶮に拠って勝頼の兵を防ぎながら、急使を馳せて救いを信長に求めた。そこで、信長は久しく計画をしていた甲州征伐を、これを機会にいよいよ決行することにした。

けれども、信長は決して武田氏がそう弱いとは思っていなかったもので、極めて慎重に部署を定めた。自分はその子信忠と共に諸将を率いて信濃口から進むこととして、同盟軍の徳川家康は駿河口から、北條氏政は関東口から、それぞれ同時に甲斐に侵入して、勝頼を包み撃つことにした。

ところが、なんという武田軍の脆さでしたでしょう！ 織田氏の先鋒が木曾口に入るや否や、城という城は一戦にも及ばずして皆潰えた。中には、敵の姿を見ずに城を棄てて走る者もあった。わづかに死守して防ごうとしたのは勝頼の弟の仁科信盛が守っていた高遠城だけでしたが、これとて、破竹の勢いで殺到してきた敵の大軍に対しては一たまりもなかった。関東口も皆潰えた。

### たけだし めつぼう 武田氏の滅亡

武田勝頼は四周の形勢が悉く不利なのを知ると、色を失って居城の新府に退いたが、更に家来の小山田信茂が勤めるままに、彼の居城である要害堅固な岩殿山に退こうとして笹子峠の下の駒飼まで来た。

ところが、ここで彼は信茂が実は叛いて、敵に内応していたのを知って、茫然としたが、今はすでに

前後から敵は迫って来たし、進む事も退くことも出来なかったもので、止む無く道を左方の山間に転じて天目山に向かい、その麓の田野まで行って、従兵らが大いに防ぎ戦っている間に、夫人北條氏（北條氏政の娘）及びその子の信勝（すなわち母は織田信長の姪）と共に自殺した。武田氏はここに19代、460余年で亡びた。実に天正10年3月11日の事で、信玄が卒してから僅かに9年の後です。時に勝頼は37才、信勝は16才、北條氏は29才でした。

それにしても、僅かに1ヶ月前に勝頼が諏訪に向った時には、20,000の大兵を率いていたのなのに、ついに華々しい合戦には1度も及ばなくて、総崩れに崩れて逃げたり降ったりしてしまっただかと思うと、いかに武田氏が衰えていたか、又、いかに勝頼が、平素、民心を失っていたかも知れるのであります。今、



甲州市 大和町 景徳院

## 第17話 織田信長の四方征伐

ちゅうおうせん はじか のえき けいとくいん かつより ち おな  
中央線の初鹿野駅の東約 3.3 km のところに景德院という寺があります。勝頼らが自殺した地に、同じ  
せんし かしん こみやまないぜん おとうと ねんきょう ぼう た けいだい かつより はか  
くここで戦死した家臣小宮山内膳の弟の拈橋という坊さんが建てた寺で、その境内に今も勝頼らの墓が  
あります。

のぶなが あづち はつ ぜんぐん あま ようい ほろ  
信長は3月5日に安土を発して信濃口に向ったが、その前軍が、余りに容易に武田氏を滅ぼしたので、  
あき  
むしろ呆れたくらいでした。4月2日に甲斐に入り、功を論じて武田氏の領地を諸将に分配したが、こ  
たきがわがずます こうづけ あた かんとう ちん とくがわいえやす するが  
の時、滝川一益には上野を与えて関東を鎮せしめ、徳川家康には駿河を与えた。そして10日に甲斐を発  
きろ  
して帰路につき、21日に安土に凱旋しました。

かつより ききゅう さい うらぎ おやまだのぶしげ ひきょう ふちゅう のぶなが にく  
ついでに言いますと、勝頼が危急の際にこれを裏切った小山田信茂は、その卑怯な不忠を信長に憎ま  
ま  
れて、間もなく甲府で誅せられました。

( 第17話 織田信長の四方征伐 終わり。 次は前頁に戻り、第18話 本能寺の変 へ)